

ベトナム中部の山間地域における住民の生業と

内水面資源の利用可能性

-少数民族カトウの村落を事例に-

波岸 彩子

キーワード： ベトナム、山岳少数民族、生業、地域研究、資源、養魚

1. 背景と目的

ベトナム中部における山岳少数民族の人々は、複数の生業を組み合わせ生計維持していたが、近年は現金収入源がアカシア生産に依存しており、生態環境への負荷が高まる懸念がある。このような地域において、生産サイクルの比較的短い資源によって生計向上を実現し、同時に、アカシア生産への生計の依存度を下げることで生態環境への負担を減らす方策を見出すことが本研究の関心である。本研究では、地域資源のひとつである内水面資源に焦点を絞り、人々の生業を理解した上で内水面資源の利用可能性について論じることを目的とした。

2. 調査地域と調査方法

現地調査は2012年8月から2013年9月の間に3回、合計5ヶ月半実施した。調査対象地はベトナム社会主義共和国フエ省アルイ県フンラム社に位置する、山岳少数民族カトウの集落である。調査は、質問票や会話による情報収集、観察、資料収集により行った。

3. 結果と考察

ベトナム中部の山間地域には山岳少数民族が多数居住しているが、戦後の定住化政策及び森林保護政策の推進によって伝統的な移動耕作が規制され、現在は水田耕作によって主食を生産していることが明らかとなった。しかし、農地不足からコメの生産量が不足しており、人々は不足したコメを購入する必要があった。また経済急成長に伴う物資輸送路の発達によって地域社会の中にも貨幣経済が浸透し、人々は現金収入を求めるようになってきていることが明らかとなった。この中で、人々の現金収入源はアカシア生産に大きく依存しており、生態環境への負荷が高まる懸念があった。また、対象地域における内水面資源として天然魚と養殖魚が挙げられるが、河川での漁獲量が頭打ちなことから、今後養魚の重要性が高まることが予測された。

山間地では高標高が養魚にとって不利な条件を呈しており、また養魚に割くだけの経済力・労働力が不足しているという実態も明らかとなった。そこで、最低限の投資と労力によってこれらの問題点を克服する方法を検討した。現地調査中に観察された実際の事例から、高標高地帯では、浅池が温度・栄養条件を改善する可能性を持っていることが明らかとなった。この事例を受け、既存の養魚池に対し最小限の掘削作業を行うことで、水温・栄養条件を改善し、養魚にとって不利な条件を克服しうることが明らかとなった。

少数民族の暮らしは変容のさなかにあり、人々の価値観や求めるものは現金収入へと依存してきているが、内水面資源のような地域資源を有効利用することで生計を向上し、現金収入の機会を生み出すことで、生態系への過度な負担を軽減する余地はあると考えられた。